

2017年度国際看護学演習 : ニュージーランドにおける海外研修報告

著者	平良 美栄子, 西上 あゆみ, 西内 恭子
雑誌名	梅花女子大学看護保健学部紀要
号	8
ページ	29-37
発行年	2018-03-22
URL	http://doi.org/10.20832/00000120

2017 年度国際看護学演習：ニュージーランドにおける海外研修報告

The Report of Global Health Nursing Overseas Practicum in New Zealand

平良美栄子, 西上あゆみ, 西内恭子

TAIRA Mieko, NISHIGAMI Ayumi, NISHIUCHI Kyoko

要旨

2017 年度国際看護学の授業の一環として、ニュージーランドにて国際看護学演習を実施した。今年度は、看護学科のカリキュラムの編成に伴い、国際看護学演習の開講時期が 4 年次開講から 3 年次開講となり、3 年次生および 2 年次生の 2 学年合同での開講となった。ニュージーランドのオークランドにある Manukau Institute of Technology (マヌカウ工科大学) を中心に、周辺の保健医療施設において急性期病院やホスピス施設など様々な医療施設を見学し、他国の看護を学ぶ機会が得られた。また、学生達は他民族、多文化で構成されているニュージーランドでのホームステイを通して、現地の方々と実際に協同し、生活する中で様々な刺激を受け、国際看護に対する今後の目標を深めていることが明らかとなった。

キーワード：国際看護学 海外研修 ニュージーランド

Key word : Global health nursing, Overseas Practicum, New Zealand

I. はじめに

本学では 2013 年度より国際看護学演習の一環として、海外での研修を実施している(張 & 田代, 2014、田代 & 張, 2015、田代、巽、藤田、張、2016)。一方、看護学科のカリキュラム検討も行われ、2015 年度入学生の国際看護学演習は 4 年次開講から 3 年次開講へ変更となった。これらのことから 2017 年度の国際看護学演習は、2 学年同時の開講となった。本稿で

は、2017 年度の授業の一環として 2017 年 2 月に実施された国際看護学演習の概要および海外演習の前後に行った学生の評価について報告する。

II. 国際看護学演習の科目の位置づけ

国際看護学演習は、「国際的な視野を持ち、国際交流や国際協力に貢献できる基礎能力を養う」という、看護学科の教育目標の一つで

ある国際交流や災害時に貢献できる人材育成を主眼に実施されている。この演習を受講するためには、多文化共生看護学、国際看護学の単位を修得していることを原則としている。

演習の主たるプログラムはニュージーランドでの研修であるが、研修前に、本学で行われてきた海外研修報告（アメリカ、オーストラリア）を中心に紹介すると共に、4 グループに分かれて、ニュージーランドの文化や医療制度、看護教育などについて事前学習を行った。また、前年度と同様に学内教員の協力を得て、渡航前に英会話の授業も実施した。研修後は、海外研修についての報告会を実施するため資料を作成し、学内での発表を行った。事前学習、ニュージーランドでの研修、事後の発表会までを成績評価の対象とした。

Ⅲ. 2017年度演習の概要

国際看護学演習は、「自国の保健医療制度、看護や生活する人について理解したうえで、主として研修国での体験学習や看護学生との交流を通して、異なる文化圏の価値観や健康問題を理解する。保健・医療・福祉システムの異なる国において、その国の地域独自の看護の役割、機能を理解する」ことを学習目標としている。

1. 研修場所

研修地は、ニュージーランド国内のオークランドにある Manukau Institute of Technology (MIT: マヌカウ工科大学) であ

る。MIT は、オークランドシティの中心部より約 15 km の位置にキャンパスがあり、約 18,000 人の学生が通っている。世界各国の留学生が受け入れられており、先住民族であるマオリ系、ヨーロッパ系、ポリネシアン系、アジア系など多種多様な民族が暮らしており、MIT 周辺はニュージーランド周辺の島から移住した人が多く住んでいる地域でもあり、多民族、多文化の中で学ぶことができる環境にある。

2. 演習参加者

3 年次生 6 名、2 年次生 6 名の計 12 名の看護学生および教員 3 人である。

3. 研修期間

2017 年 2 月 18 日から 26 日までの 9 日間であった。

4. 研修プログラム

表 1 に 2017 年度のプログラム概要を示す。語学研修は、MIT 内の教室にて実施された。

行程	研修内容 (午前)	研修内容 (午後)
2/18(土)	出国	
2/19(日)	現地到着	MITよりホストファミリー宅へ
2/20(月)	マオリのウェルカムセレモニー オリエンテーションおよび周辺案内	講義：ニュージーランドのヘルスケアシステム、看護師の役割、労働条件等について
2/21(火)	看護学部内の見学 現地学生の授業風景見学	語学研修
2/22(水)	語学研修	Middlemore Hospital ミドルモア公立病院の概要、整形外科病棟・熱傷治療センター・小児病棟の見学、NZにおける精神科看護の現状について受講
2/23(木)	語学研修	Manukau Super Clinic マヌカウスーパークリニックの概要および特徴、モジュール（診療科）の体制について
2/24(金)	Totara Hospice トータラホスピスの概要および特徴、緩和ケアの特徴について受講	修了証書授与、さよならランチ
2/25(土)		自由研修
2/26(日)	現地出発	帰国

IV. 演習の評価

1. 調査方法

演習に参加した学生 12 名に対し、先行研究を参考に独自で開発した質問紙を用いて調査を実施した。質問紙は海外演習参加前と演習終了後に配布し、無記名自記式質問紙を用いて実施した。

2. 調査項目

1) 演習前の質問紙

①国際看護学演習の履修目的について複数回答で質問し、②国際看護学演習に期待していること、③国際看護学演習を履修するにあたって不安に思うことについてそれぞれ記述してもらった。

2) 演習終了後の質問紙

①授業への積極的な参加について、②授業の理解度、③授業参加における自己成長への貢献度、④授業参加における看護職者への貢献度、⑤授業時期について、⑥授業内容の期待度との相違、⑦国際看護への関心度、⑧授業の困難度、⑨国際看護の学習継続の意思についてそれぞれ、「そう思う」、「どちらかというと思う」、「あまりそう思わない」、「そう思わない」の 4 件法で評価を行った。また、①から⑨に関して、それぞれの理由について記述を依頼した。

3. データの分析方法

データは、調査内容毎に単純集計を行った。演習終了後の調査について、1=そう思う、2=どちらかというと思う、3=あまりそう思

わない、4=そう思わない、とデータを数値化し、分析時に数値の逆転化を行った。記述内容については、回答毎にその代表的な意見をまとめた。

4. 倫理的配慮

演習参加者には、演習の効果について評価するために質問紙調査を実施し、その結果について紀要等で公表することを説明した。また、調査への協力は任意であり、協力しない場合でも成績や評価などに不利益を被ることがないことを説明した。質問紙は自記式無記名での回答を依頼し、個人が特定されることがないことを保証した。

V. 結果

1. ニュージーランドでの研修

現地 2 日目 (2 月 20 日) の午前は、MIT 内の施設にてマオリ族のウェルカムセレモニーが催され、マオリ族の文化を直接学ぶ機会が得られた (写真 1)。学生達も事前に準備した歌を披露し、歓迎への謝意を示した。また、セレモニー後にミニパーティーが開催され、MIT の学生らとの交流も図られた。午後は、MIT の看護教員による講義が行われた。主な講義内容は、ニュージーランドの人口構成、歴史、医療保険制度、看護制度、看護教育制度、看護学部の概要などであった (写真 2)。

写真1 ウェルカムセレモニーの施設



写真2 MITでの授業風景



3日目（2月21日）の午前は、看護学部内の見学が行われ、解剖実験中の看護学生の演習室に案内され、演習状況を間近で見学し説明を受けた（写真3）。MIT看護学部では、動物の解剖実験を通してそれぞれの臓器の働きについて学んでいた。また、看護技術を学ぶ演習室（写真4）やシミュレーションルームを見学した。演習室は日本と同様にベッドやオーバーテーブルなどの病床環境が整備されるとともに、シャワー室が完備され、身体の清潔が援助できるようになっていた（写真5）。

さらに、看護師の身体を保護する目的で、体動困難な患者や過体重の患者の移動を支援するための機器が設置されていた（写真6）。シミュレーションルームでは、5～6名の学生が一度に学習を行うことができ、隣接した部屋から患者の声などをシミュレーションし、より実践的な演習状況が提供できるように工夫されていた。午後は、MIT内の教室にて医療英語を主とした語学について学ぶ機会が得られた（写真7）。学生らは、初回こそ緊張した面持ちであったが、英語教師の授業を経て、日々、伸び伸びと語学を学んでいた。

写真3 MITでの授業風景（解剖実験室）



写真4 MITでの授業風景（看護演習室）



写真5 MITでの授業風景(看護演習室)



写真6 MITでの授業風景(看護演習室)



写真7 MITでの授業風景(語学研修)



4日目(2月22日)の午後は、Middlemore Hospital(ミドルモア公立病院)を見学した。ミドルモア公立病院は、約800床の公立の総

合病院である。救急や内科、外科などの急性期の幅広い医療サービスを提供しており、特に国内に2か所しかない熱傷治療センターを完備した総合病院である。ニュージーランドでは、公立病院での病気の診療費用は国庫よりまかなわれており、ニュージーランド国民および永住権保持者の医療費は無料とのことである。この病院ではヒルを用いた瀉血治療が行われており、医療用のヒルの飼育状況なども見学することができた。

写真8 ミドルモア公立病院



5日目(2月23日)の午後は、Manukau Super Clinic(マヌカウスーパークリニック)の見学を行った。マヌカウスーパークリニックは、10のモジュールで編成された診療科を有しており、外来診療および日帰り手術を主とした公立の病院である。かかりつけ医であるGeneral Practitioner(一般開業医:GP)の紹介により専門医への受診や、事前に予約した手術を扱い、緊急の手術は行っておらず、ミドルモア公立病院と連携をとっているとのことであった。また、透析治療を行っており、午前中に約50名、多い時には1日180名の透

析患者の治療に対応しているとのことであった。

写真9 マヌカウスーパークリニック



6日目(2月24日)の午前は、Totara Hospice (トータラホスピス)の見学を実施した。トータラホスピスは、南オークランドエリアに位置した22床のホスピスである。入院場所は全て個室対応をしており、入院期間は1~2週間程度と短く、入院費用は寄付などにより賄われており無料とのことであった。がんの患者だけでなく、慢性疾患や難病の患者への対応、レスパイトケアへも対応がされていた。

写真10 トータラホスピス



2. 演習の評価

1) 国際看護学演習の事前評価

学生へ国際看護学演習の履修目的を複数回

答で尋ねたところ、最も多かったのが「自己の成長に役立つと思うから」という意見で83.3%を占めていた。次に多かったのが、「演習内容に興味・関心を持ったから」という66.7%であった。また、33.3%の学生が将来、海外で働くことを考えていると回答していた(図1)。

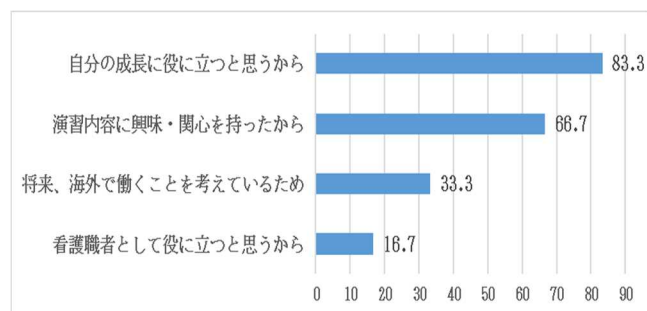


図1 国際看護学演習の履修目的(複数回答) n=12

国際看護学演習に期待していることとして、「日本とニュージーランドの医療施設、医療体制や看護の違い、文化の違いについて学びたい」、「語学力の向上」、「その国の文化や暮らしについてホームステイを通して体験し学びたい」などが挙げられており、異文化での生活や人々との関わり、医療体制や看護体制の相違について体験し、学ぶことを期待していることが明らかとなった。

国際看護学演習を履修する上で不安に思うこととして、「言葉の壁」、「ホストファミリーとの意思疎通」、「コミュニケーションがとれるかどうか」、「看護についての知識不足」などが挙げられており、ほとんどの学生が英語でコミュニケーションを行うことへの不安を抱いていた。

2) 国際看護学演習の事後評価

国際看護学演習の終了後にプログラムについての評価を行った（表 2）。

演習後の評価で高かった項目は、「授業は自分の成長のために役立つと思う」で4点満点中平均 3.9 とほとんどの学生が、今回の演習が自己成長に繋がる機会となったことを示しており、多様な価値観や考えに触れたことや経験を通して視野が広がったことなどを理由としてあげていた。また、次に高かった項目としては、「授業が看護職者に役立つ」の平均 3.8 であった。その理由として、学生自身が文化の違いに柔軟に対応できる力がついた

ことや演習によって多文化や異文化を持つ人々の文化的背景を尊重する重要性に気づいた点などがあげられていた。「授業を受けて国際看護への興味が深まった」に対しては平均 3.6 で、ホームステイや日々の演習を通して多くのことを体験し学べたことや、諸外国に対する関心の深まりをあげていた。さらに、「授業は思っていたより難しかった」に関しては平均 2.5 と低く、演習前に学生らが抱いていた「英語でのコミュニケーション」に対する不安は、実際の演習体験により、日々悩みながらも難しさを感じる以上に有意義な演習となっていたのではないかと考える。

表 2 国際看護学演習終了後の評価（評価基準：4=そう思う～1=そう思わない） n=12

質問項目	平均値	主なコメント
授業に積極的に参加できた	3.2	日が経つにつれ質問する機会が増えた/どのプログラムも意欲を持つことができた/質問はしたがもう少し積極的に行えば良かった
授業内容はどれも良く理解できた	3.4	通訳の方が丁寧に説明してくれた/NZと日本を比較しながら知ることができた/研修前に比べて知識が増えた
授業は自分の成長のために役立つ	3.9	多様な価値観や考えに触れ視野が広がった/自分の成長につながる経験と学びとなった/今までにない視点で物事をみれた
授業は看護職者に役立つ	3.8	多文化、異文化を持つ人を対象とするため文化的背景を尊重できる重要性/文化の違いに柔軟に対応できる力がついた
授業時期はちょうどよかった	3.5	実習後であったから日本の病院の知識もあった/2・3年生で参加できたのが良かった/基本的な看護は学んだ後だったから
授業は期待した内容と同じであった	3.3	期待以上であった/施設見学の時間が少なかった/知りたいと思っていたことを学べた/海外の医療施設を見学できる機会ないから
授業を受けて国際看護への興味が深まった	3.6	実際に海外に行き生活の中に入り体験し学ぶことが多い/もっと多文化や国際看護、他国のことについても学びたい
授業は思っていたより難しかった	2.5	もともと興味があったから特に感じない/覚悟はしていたが言葉の壁に悩むこともあった/多くの学習が必要だったから
国際看護について継続して学習したい	3.3	今後に活かしたい/将来、携わっていきたい/青年海外協力隊に参加したい/研究や国際看護の問題点などもっと勉強したい
研修プログラムの平均値	3.4	

VI. 考察

1. ニュージーランドでの演習プログラム

今回、MIT での看護学部の授業、医療英語を含む語学研修に加えて、公立病院、スーパークリニック、ホスピスなどのさまざまな医療施設を見学した。

MIT では、マオリ族のウェルカムセレモニーを体験したが、MIT 内にマオリ族の文化を尊重し、気軽に立ち寄れる施設や人の配置がされており、文化や人々に対する配慮がなされている現状を理解することができた。また、MIT 内の学生達や教員との交流、MIT までの公共交通機関での移動などを通し、ニュージーランドが他民族・多文化社会で形成されているということを実感することができた。実際、学生達のホームステイ先のホストファミリーも様々な人種の方々に構成されていた。

ニュージーランドの看護制度では、生後 6 週間までの乳児に対しては助産師が担当するが、6 週以後の乳児から 5 歳未満の幼児に対しては、Plunket Nurse が看護を提供する制度があることや病院ではヒルを用いた治療法が行われるなど、日本とは異なる看護制度や治療法について学ぶことができた。また、様々な医療施設を見学する中で、ニュージーランドの医療問題として肥満や糖尿病、精神疾患の問題が大きな健康課題としてあげられる現状についても理解することができた。これらの健康課題については、多少の違いはあるが日本でも類似の問題が散見されることから、

文化・社会的な相違とともに類似の健康問題についても考える機会となった。

2. 演習の評価

演習前の履修目的の結果より、8 割以上の学生が自己の成長に役立つことを期待していることがわかった。また、3 割の学生が将来、海外で働くことを視野に入れて海外演習に臨んでいる状況が明らかとなった。一方で、多くの学生が英会話やコミュニケーションに対する不安を抱えていた。英語力に関する学生の不安に関しては、先行研究でも同様の不安を訴えていることが報告されており（張&田代、2015. 田代、巽、藤田、張、2016.）、日常的に外国人と接する機会の少なさが影響しているのではないかと考える。

演習後のプログラム評価は、4 点満点中、大旨 3 点以上であり、高い評価を得ていた。とくに「授業は自分の成長のために役立つ」については平均 3.9 であり、演習前の学生の期待にこたえる結果となっていたのではないかと考える。「授業は看護職者に役立つ」、「授業を受けて国際看護への興味が深まった」という項目の評価も高く、また「国際看護について継続して学習したい」という項目のスコアも 3.0 以上を示しており、これからますます国際化していく日本において、多文化や異文化を受容できる国際的な視野を育成した看護教育が求められているのではないかと考えることから、有用な授業構成であったのではないかと考える。

学生は演習前に英語力や会話などに対する不安を示していたものの、演習後の評価では、実際には思っていたよりも難しいと回答していないことから、演習中の9日間は学生にとって適度なレベルの学びの場であったのではないかと推察される。

謝辞

2017年度国際看護学演習実施にあたり、ご協力下さいました本学の教職員の皆様に感謝申し上げます。また渡航前英会話レッスンを担当して下さいました食文化学科教授、上村幸広先生に深く感謝申し上げます。最後に報告書作成にあたり、評価の回答にご協力下さいました履修生の皆様に感謝申し上げます。

文献

張曉春, 田代麻里江(2015): 2013年度国際看護学演習におけるオーストラリア海外看護研修, 梅花女子大学看護学部紀要, 第5号, 19-29.

Manukau Institute of Technology, Nursing, 2017年7月12日,
<https://www.manukau.ac.nz/study-options/areas-of-study/nursing-and-health-studies/nursing-and-health-studies>.

Nursing Council of New Zealand, 2017年7月12日,
<http://www.nursingcouncil.org.nz/>.

日本看護協会国際部(2010): 看護教育・規制の各国動向, 2017年7月12日,
<https://www.nurse.or.jp/nursing/international/working/pdf/doko.pdf>.

日本看護協会国際部(2016): 看護師の教育規制, 2017年7月12日,
<https://www.nurse.or.jp/nursing/international/working/pdf/kango.pdf>.

白石知子, 大橋裕子, 今村恵子, 出口みどり, 山田知子(2014): 保健師学生のための異文化学習プログラムの検討—ニュージーランドにおける看護海外研修の視察より, 生命健康科学研究所紀要, 11, 57-63.

田代麻里江, 張曉春(2015): 2014年度国際看護学演習におけるオーストラリア海外看護研修報告 梅花女子大学オリジナル海外研修プログラム企画の試み, 梅花女子大学看護学部紀要, 第5号, 7-18.

田代麻里江, 巽彩香, 藤田栞, 張曉春(2016): 2015年度国際看護学演習: 米国カリフォルニア州における海外看護研修報告, 梅花女子大学看護保健学部紀要, 第6号, 33-44.